

格差社会を変革する エシカルな活動

東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男

エシカルの登場

エシカル・コンシューミング、エシカル・ファンド、エシカル・インベストメントなど、エシカルを接辞とする活動が最近注目されている。倫理にかなう消費、基金、投資という意味であるが、商品を購入するときに値段だけではなく、環境や社会への配慮を基準にして決定する行動がエシカル・コンシューミング、年金基金などが経済利益だけではなく環境や社会に貢献している企業に投

資することがエシカル・インベストメントである。

このような風潮を反映し、過酷な労働条件や自然環境の破壊をともなう採掘される宝石を使用しない宝飾品はエシカル・ジュエリー、開発過程で実験動物を犠牲にしない化粧品はエシカル・コスメティックス、天然素材を使用し、縫製加工で発展途上諸国の子供などを酷使しない衣料品はエシカル・ファッションと命名され、それらを総合して挙式する結婚式はエシカル・ウェディング、



花嫁はエシカル・ビューティとなる。このような経済活動は最近になり突然登場したわけではない。一九七六年にイギリスで創業し、現在では世界に二〇〇〇店舗以上を展開して

いる「ザ・ボディショップ」は天然素材のみを原料としたエシカル・コスメティックスの元祖であるが、企業理念に地域社会の支援や地球環境の保全を明記している。世界の企業からエシカル・カンパニーを認定する制度も創設され、昨年は四一業種の一四四社が認定されている。

格差を拡大する資本主義

この背景にはエシカルではない活動が世界で急速に拡大してきた状況がある。

話題のトマ・ピケティの大作『二世紀の資本』の主題は、資本主義経済は規制しなければ格差を拡大させる本質を内包するが、その格差の拡大が異常になっているということである。アメリカでは所得上位一割の人々の収入が国民全体の収入の五割以上になり、資本主義経済を導入し始めたばかりの中国でさえ、その割合が六割を突破している。

格差が拡大していく前方に出現するのは社会の騒乱である。二〇一一年秋には世界の資本主義の拠点であ

るニューヨークのウォールストリートで長期の占拠事件が発生したが、そのときのスローガンは「我々は九九%」であった。一見すれば裕福であるアメリカ国民が収入や資産の偏在を切実に実感し始めたのである。これは全米各地に波及しただけでなく、欧州諸国にも抗議活動が連鎖した。資本主義経済の矛盾が噴出したのである。

このような矛盾にはノーベル経済学賞も反応している。一九九七年にはバブル経済の誘因となった金融工学を開発した二人のアメリカの経済学者が受賞したが、翌年には飢饉発生者の構造を分析し、経済に倫理を導入する必要性を提唱したアマルティア・セン、昨年は巨大企業の独占を規制して、一般国民の利益を確保する制度を研究したジャン・ティローがそれぞれ受賞している。前述のピケティも近々受賞すると期待されている。

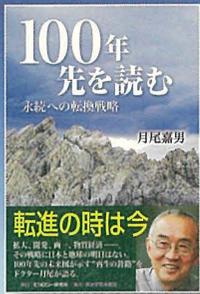
伝統を見直して日本を再生

この動向に日本は出遅れているよ

うであるが、世界の経済の歴史ではエシカルを近世以来意識してきた由緒ある地域である。

あまりにも有名な近江商人の心得「三方よし」は、売り手と買い手という商売に直接関係する立場だけではなく、世間にも貢献することを本義とした内容であるし、醤油製造の老舗である茂木一族の家憲「徳は本なり、財は末なり」は、「徳」を倫理と理解すれば、企業経営の本質が利益にあるのではないことを明示している。

残念ながら、昨今の日本では伝統の理念が弱体になりつつある。安倍内閣が法人実効税率の引下げを検討しているが、現実には税引後純利益が三三七〇億円で納税約六〇〇万円の銀行、同様に三一七〇億円の純益で納税一〇〇〇万円の会社などが存在している。消費税率が上昇する一方、合法とはいえ、このような不平等感をもたらす経済活動が横行しているのが現在の資本主義経済体制である。ぜひ日本の文化を再興してほしい。



絶賛発売中!!
ご注文は添付のハガキで